なによって熱愛せられるこの独得の色によって、かつてドイツ民族のために数多くの栄誉をかちえたもので、ただ過去に対する畏敬の念をわれわれにおこさせるだけでなく、それはまた運動の意図を最もよく具体化したものだった。国家社会主義者としてわれわれは、われわれの旗の中にわれわれの綱領を見る。われわれは赤の中に運動の社会的思想を、白の中に国家主義的思想を、ハーケンクロイツの中にアーリア人種の勝利のための闘争の使命を、そして同時にそれ自体永遠に反ユダヤ主義であったし、また反ユダヤ主義的であるだろう創造的な活動の思想の勝利を見るのだ。

二年後には——そのときにはすでに整理隊からとっくに数千人を包括する突撃隊になっていたが——この若い世界観の防衛組織に、特別な勝利のシンボルを与えることが必要である、と思われた。すなわち、隊旗である。それもまたわたし自身が図案をつくり、そして古くからの忠実な党員、金細工師ガールに、その仕あげをまかせた。それ以来隊旗は国家社会主義の闘争の目印になり、軍旗になったのである。

*

ツィルクスの第一回集会

一九二〇年にますます盛んになってきた集会活動は、ついに毎週しかも二回開くまでになった。われわれのポスターに人々は群がる。町でいちばん大きい講堂はいつもいっぱいになる。そして誤った道に導かれた何万というマルクス主義者は、きたるべき自由のドイツ国の闘士となるため、民族共同体へもどる道を見いだしたのだ。ミュンヘンで公衆は、われわれを知った。人々はわれわれのうわさをし、「国家社会主義者」ということばが、多くの

人によく知られ、すでに一つの綱領としての意義をもってきた。また、支持者の群も、そのうえ党員さえもたえず増加しはじめた。そのようにして、一九二〇年から二一年にかけての冬にわれわれは、すでにミュンヘンで強力な党として登場することができた。

当時はマルクス主義政党をのぞいては、政党はなかった。とりわけわれわれのように、こういう大衆示威運動で注意を促すことができるような国家主義的政党はなかった。五千人を収容するミュンヘナー・キンドル・ケラーは、一度ならずしばしば破れんばかりにいっぱいになった。そしてわれわれがまだあえて近づかないただ一つの会場があった。これがツィルクス・クローネだった。

一九二一年末、ドイツにとってまた苦しい心配事がもちあがった。ドイツに不合理な一千億金マルクの支払い義務を負わせたパリ協定が、ロンドン協約の形で実現することになったのだ。

ミュンヘンにずっと前からあったいわゆる民族主義同盟の協力団体[12]が、これをきっかけとして大々的な共同抗議に招こうとした。時は非常に切迫していた。わたし自身は、一度決定したことを実行にうつすのをいつまでもちゅうちょし、ぐずぐずしているのをみていらいらしていた。はじめはケーニヒスプラッツで示威大会をやるといっていたが、人々は赤になぐりこまれるという心配からふたたびこれを中止し、そしてフェルトヘルンハレ前の抗議示威運動を計画した。だがさらにこれもやめ、そして最後にミュンヘナー・キンドル・ケラーで合同集会をやると提案した。とかくするうちに、一日一日とたっていった。大政党は、この恐ろしいでき事にいっこうなんの注意もしない。協力団体も、ついに計画した示威大会のはっきりした日取りをきめる決心をつけ

ることができなかった。

一九二一年二月一日、火曜日、わたしは最後的決定を切に要求した。わたしは水曜日にしたらとなぐさめられた。それだから水曜日に、わたしは、集会は行なわれるのか、いつ行なわれるのか、と絶対に明白な報告を求めた。答はまたもやはっきりせず、いいのがれだった。人々は、労働団体が来週水曜日に示威大会を起す「つもり」だという。

そこでわたしの堪忍袋の緒が切れた。わたしは抗議示威大会をただひとりでやろうと決心した。水曜日の正午に、わたしは十分間で口授し、ポスターをタイプライターでうたせた。そして同時に翌二月三日木曜日にツィルクス・クローネを借りさせた。

当時これは、際限もなく大きな冒険だった。あの巨大な会場をいっぱいにすることができるかどうか疑問に思われただけでなく、強制解散させられるという危険もあったのだ。

わが整理隊は、この巨大な会場を守るためには、まだじゅうぶんでなかった。わたしもまた、強制解散させられる場合に、どういう処置をとったらよいか、適当な考えが浮かばなかった。そのころ、わたしは普通の講堂を使うよりも、ツィルクスの建物でやるほうが、ずっと困難が大きいと思っていた。だが、これはやってみて明らかになったのだが、まさしく逆だった。狭い講堂にぎっしり詰っているよりも、巨大な会場のほうが、強制解散させようとする一群のものを事実上もっと容易におさえることができた。

ただ一つ、一度でも失敗すれば非常に長い間押しもどされるということが、確かだった。というのは一度でも強制解散が成功すれば、われわれの後光は一撃で破壊され、敵は一度成功したこ

とをなん度もくりかえしてやろうと元気づくからである。そうなると、われわれの今後のすべての集会活動がサボタージュされるにちがいなく、また何か月も困難きわまる闘争をやって後に、やっとそれを克服することができるにちがいないからである。

われわれはビラをはるのにわずか一日しかなかった。すなわち木曜日だけだ。不幸にして、朝から雨が降っていた。こういう状態では多くの人が、雨や雪のときに、人殺しやなぐり殺しがあり かねないような集会に急ぐよりは、むしろ家にひきこもっているのではないか、と考えるのも無理ではないように思えた。

とにかく、木曜日の午前中わたしはとっぜん不安になった。どっちみち会場はいっぱいになりえないのだろう（そうなれば実際わたしは労働団体の笑いものになるだろう）、そこでわたしは大いそぎで若干のビラを口述し、午後それを配布させるために印刷にまわした。もちろんこれは集会への参加を求めるものだった。

わたしが借りさせた二台のトラックは、できるだけ赤い色でおおわれた。その上にわれわれの旗を二本立て、おのおのトラックに十五ないし二十人の党員が乗った。かれらは懸命に街路を飛ばして、ビラをまくべし、要するに今晩の大衆示威大会の宣伝をなすべし、という命令をもっていた。マルクス主義者の乗っていないトラックが旗を立てて町を走ったのは、これが最初であった。だから市民たちは赤く飾りたて、はためくハーケンクロイツ旗で飾った車をぼうぜんと見送っていた。その間に町はずれでは無数の拳骨がふりあげられ、かれらはこの最も新しい「プロレタリアートへの挑発」に対してあきらかに憤激しているらしかった。というのは、トラック

でねり回るのも、集会を開くのも、マルクシズムだけがその権利をもっていたからである。

夕方六時にはツィルクスはまだじゅうぶんにはいっていなかった。わたしは十分ごとに電話で知らせをうけていた。わたし自身かなり不安だった。というのは他の講堂だったら七時か七時十五分すぎにはたいていもう半分はきていたか、往々にしてほとんどいっぱいだったからだ。もちろんこれはまもなくわかった。わたしはこの新しい会場のとほうもない広さを計算に入れていなかった。千人くればホーフブロイハウスのフェストザールはすでにそうといっぱいに見えた。それだのにツィルクス・クローネでは一呑みなのだ。人々はそれをほとんど見ていなかったのだ。けれどもまもなくもっとよい報告がやってきた。そして八時十五分前には、会場の四分の三はつまっており、非常にたくさんの大衆が入場券売場の前に立っているとのことだった。そこでわたしは車で走った。

八時二分すぎにツィルクスの前についた。ツィルクスの前にはやはり多数の人々がいた。一部分は単なる好奇心からきたのだが、その中には、結果を場外で待っていようとするたくさんの敵もいた。

わたしが巨大なホールに踏み入ったとき、一年前にミュンヘンのホーフブロイハウスのフェストザールでの第一回の集会のときと同じような喜びが、わたしをつつんだ。だがわたしは人壁をおしわけて、一段高い壇にあがった後にはじめて、その成果のまったく大きいことをみたのだった。この広間は巨大な貝殻のようにわたしの前に横たわっており、何千人もの人でいっぱいになっていた。サーカスの走馬路すら、黒山のようだった。五千六百枚の入場券が売りだされ、失業

者、苦学生や、わが整理隊の総数をふくめて数えるならば、約六千五百人がそこにいたであろう。

テーマは「未来か没落か」というのだった。わたしは、未来がそこに、わたしの目の前にあるのを確信して、心がおどった。

わたしはしゃべり始めた。そして二時間半ほど演説した。すでにはじめの半時間で、この集会は大成功をおさめるだろうという感じをもった。これら何千人の一人一人との接触がかもしだされた。はじめの一時間後には、もう拍手が自発的に破れんばかりにますます大きくなってわたしの演説を中断しはじめ、二時間後にはふたたび興奮が静まって、そしてわたしがその後この会場でしばしばなん度も体験し、またおのおのの人にももちろん忘れがたく記録されているあの厳しゆくな静けさにもどっていったのであった。さらに人々はただこの巨大な群衆の息づかいだけを聞いていた。そしてわたしが最後のことばを語りおわったとき、とつぜんどよめき、このうえなき熱情をもってドイッチュラントの歌が歌われ、救われたような終末をみいだしたのだった。

わたしは、この巨大な会場が次第に空になりはじめ、巨大な人海が大きな中央出口からほとんど二十分もかかって押しだされていくのを、なお目で追っていた。そしてわたし自身もはじめて、非常な幸福感にみたされて、家へ帰るために自分の席をはなれたのだった。

このミュンヘンのツィルクス・クローネにおける第一回集会は写真にとられた。それはことばよりもずっとよく示威大会の偉大さを示している。ブルジョア新聞は写真と記事をのせたが、ただ「国家主義的」示威大会に関していたと述べただけだった。だがいつものように謙そんしてその主催者については何もいわなかった。

集会につぐ集会　これでもって、われわれははじめて、きまりきった普通の政党のわくから遠くへ踏み出たのだった。人々はもはやいまでは、われわれを無視して通ることができなくなった。この集会の成功がたんにかげろうのようなものであるという印象を与えないために、わたしはただちにツィルクスでの第二回示威大会を次週にきめた。そして成功は同じだった。この大会場はふたたび破れんばかりに大衆で埋った。そこでわたしは、次週には同じ形式で第三回の集会を開こうと決意した。そして第三回目には巨大なツィルクスは上から下まで人でいっぱいで、すしづめだった。

この一九二一年の開始以後、わたしはミュンヘンでの集会活動をますます高めたのだった。わたしは、いまやさらに、単に毎週一回でなく、往々にして週二回の大衆集会を開催し、そのうえに、夏の盛りや秋の終りごろには、しばしば週三回にもなった。いまではわれわれはいつもツィルクスで集会をした。そしてわれわれの集会の晩はいつも同じような成功をおさめた、と満足して確認することができたのだった。

その成果は、運動の支持者数がますます増加したことであり、党員の数が大増加したことだった。

＊

むなしい強制解散の試み　もちろん、こうした成功はまたわれわれの敵を安心せしめてはおかなかった。かれらはあるいはテロで、あるいは黙殺でと、いつも戦術が動揺していたので——

かれら自身認めねばならないのだが——どういう方法でもそれは、われわれの運動の発展を阻止することができなかったのである。そこでかれらは最後の努力として、われわれの今後の集会活動に、それによって究極的にとどめをさすように、テロ行為を決意したのだった。

この行為の外面的理由として、人々はエアハルト・アウアーという州議員に対するこのうえなくなぞにみちた暗殺計画を利用した。上述のエアハルト・アウアーがある晩なにものかに撃たれたというのである。すなわち、かれは実際に射殺されたのではないが、かれを射殺しようとしたものがあったというのだ。だが社会民主党指導者のウソのような沈着さと、なぞのような勇気は、不法な攻撃を失敗させただけでなく、この極悪な犯人自身がひきょうにも逃げるのをたたきのめした、というのだ。かれらは、警察もその後かれらについてもはやすこしの足取りもつかむことができないほど早く、遠くへ逃げてしまったという。このなぞにみちた事件を利用して、ミュンヘンの社会民主党の機関紙は、われわれの運動に対してこのうえなく過激に扇動し、同時に古くから習慣になっているおしゃべりで、次に起るにちがいないものをほのめかすのだった。われわれの木が天に達するまで成長しないよう、プロレタリアのこぶしでいまや適当なときに干渉するよう配慮せられている、というのだ。

その数日後、はやくも干渉の日がやってきた。

ミュンヘンのホーフブロイハウスのフェストザールでの集会——わたし自身がそこで話すことになっていたのだが——が、究極的な対決のために選ばれたのだった。

一九二一年十一月四日、午後六時と七時の間に、わたしははじめて実際の報告をうけとった。